婦人界評論

與謝野晶子

鏡心燈語

私は茲に貴重な「太陽」の數頁を毎號私のために割いて下さる光榮を主筆から得ました。私は何を書かうとするのでせう。それは私の明日の生活が豫測し難いのに比例して豫め定めることが出來ません。唯だ私は特に主筆から何を書いてもよいと云ふ自由を許されて居ることを非常な喜びと感謝とを以て先づ初めに明言して置きます。

私は平生他人の議論を讀むことの好きな代りに自ら議論することを好まない。議論には可なり固定した習性がある。卽ち議論には論理を一般人の目に見えるやうに操縱せねばならぬ。また議論の質を表現するのが目的であるに拘らず、量的にくどくどと細箇條を說明せねばならぬ。それが私に不得手な事であるのみならず、私自身の表現としては煩と迂とに堪へない。それからまた網を作るに忙しくて肝腎の魚を忘れるやうな場合さへある。寧ろ世間の議論の大部分はこの最後の物に屬して居る。私は其れが厭はしい。私はロダン先生の議論——先生に於ては家常の談話が——常に簡素化され結晶化された無韻詩の體であるのを、私の性癖から敬慕して居る。私の茲に書く物も私の端的な直觀を順序に頓着しないで記述する外はない。

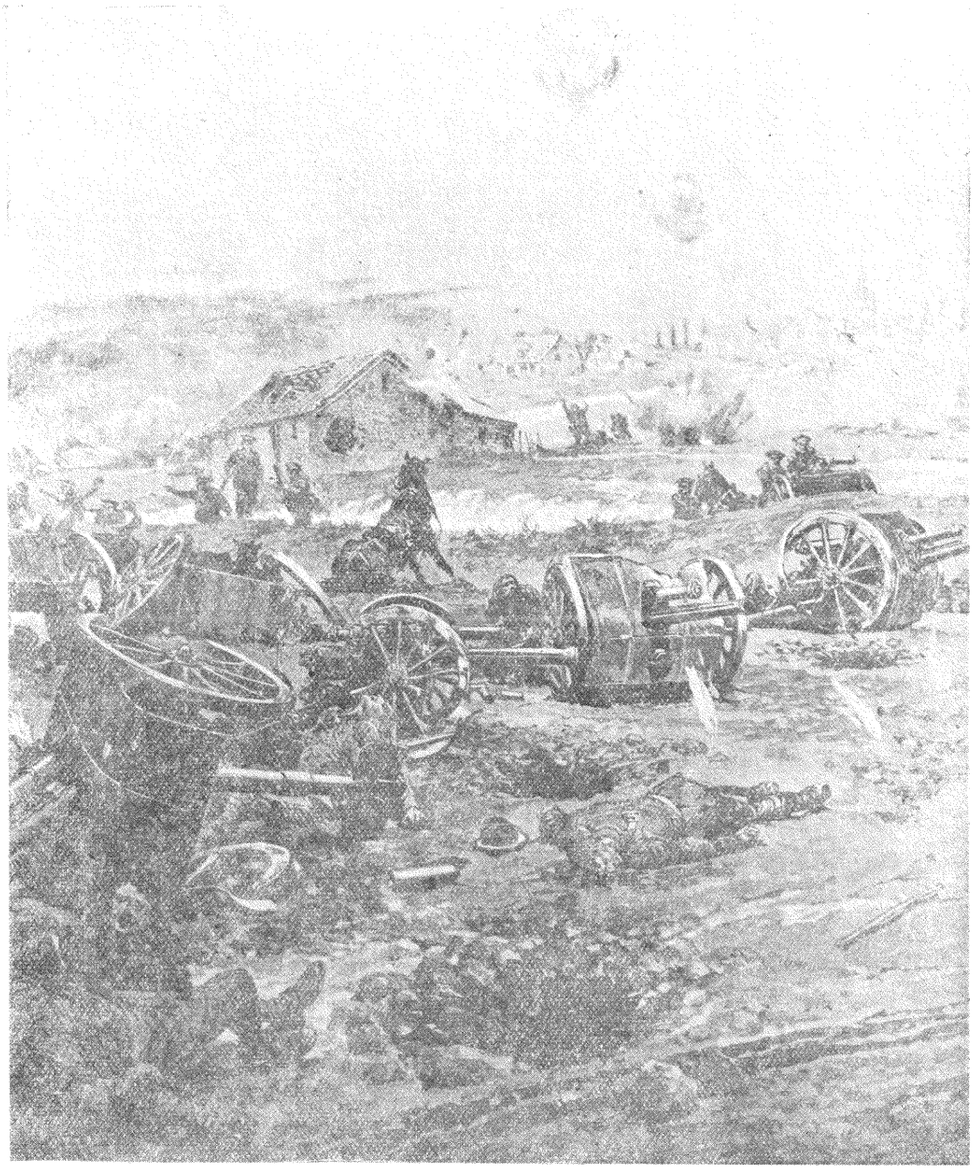
私の過去十二三年間の生活は、じつとして居られずに內から外へ踊つて出るやうな生活であつた。私は久しく眩しい叙情詩的の氣分に浮き立つて居た。併し今は反對に外から內へ還つて自分の堅實な立場を踏みしめながら、周圍を自分の上に引き附けて制御したいと思ふやうな生活が開けて來た。以前は內から蒸發する熱情と甘味とを持て餘し、自分一人では居たたまらずに誰にでも凭れ掛りたいやうな氣持で居たのに、今は靜かな獨自の冥想に無限の愛と哀愁と力とを覺えて、外界の酷薄な壓迫を細々ながら此全身の支柱に堪へて行かう更にまた出來ることなら外界を少しでも自分の手の下で鍛へ直して見たいやうな氣持になつて居る。

上の空でなくて、眞劍に、實際に、そして潑剌として生活しやうとする時、人は皆倫理的になる。倫理は人生の律である、實際の行進曲である。人生の樂譜や圖解であつてはならない。學問や敎育を職業とする人々の口にする倫理が我々の實際生活に何の用をもなさないのは當然である。命と肉と熱とを備へた倫理は我々の生活其物である。

生活は季節を擇ばずに發芽と開花と結實とを續けて行く。新しいことは眞の生活の相である。既に生活が不斷に移つて行く以上、私達の倫理觀もまた不斷に移らねばならない。永久の眞理と云ふものを求めることの愚は琴柱に膠するにひとしい。永久の眞理と云ふやうな幽靈に信賴して一方のみを凝視して居る人が、刻々に推移する人生に對して理解もなく判斷も出來ず、自分が人生の本流に乘ることを忘れ、時代の競走に落伍して居ながら、却て反感と否定とを以て世の澆季を罵つたりもするのである。

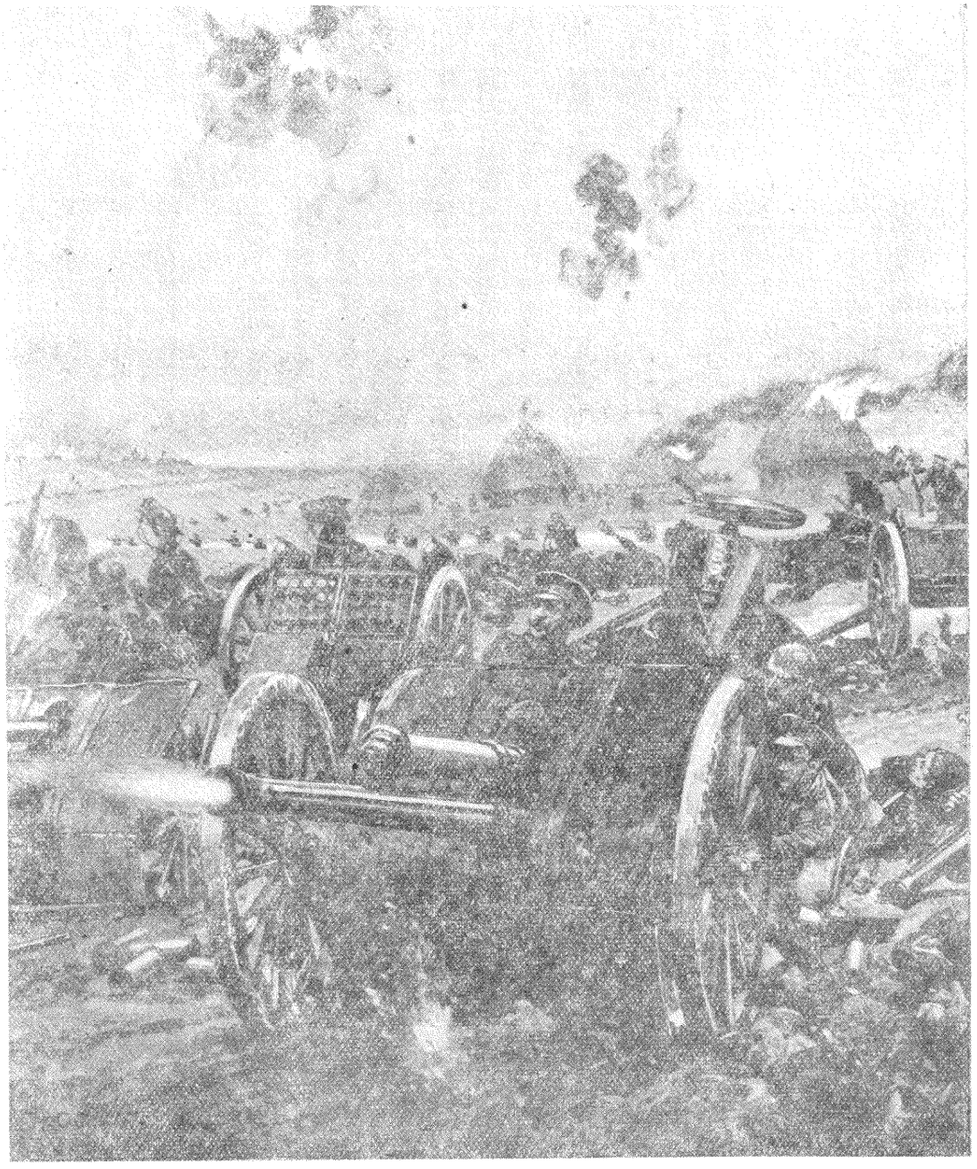
永久の眞理の無いと共に萬人に共通する眞理も無いと私は想ふ。時間と空間を通じて固定した眞理を求めることが實際の人生と相容れぬと云ふ不都合のあることに氣が附かなかつた爲めに、過去の世界が煩悶と懷疑と沮喪とに滿たされ、在來の哲學と宗敎と道德とが現代に權威を失ふに到つたのではないか。例へば「一夫に見ゆべからず」と云ふ客觀的の倫理を建てて之を婦人の生命——生活の中樞——とすることを强ひたのが從來の貞操倫理である。何故に一夫に見えてならないかと云ふ說明を附せず、無條件にこの倫理に從はしめやうとした點に於て先づ此倫理は人間の意志を無視することの殘虐を敢てして居る。

貞操倫理は愛情と性欲とに亙る問題である。詳しく云へば個人の體質と、天分と、敎育と、境遇と、靈性と、性欲と、好惡と、年齡とに關係する問題である。そして其等のものが人に由つて異つて居る以上、億兆の人の生活を一片の固定した貞操倫理で律することの出來ないのは明白である。或女は一夫に見えることすら自己の淸淨を破るものとして全く結婚を嫌つて居るかも知れぬ。或女は愛情と性欲の自發が無いた



コムスキー附近に於ける英砲兵隊の悲壯な戰（濃霧の間に陣地を拂曉霧曉に乘じて進む）　戰滅全るに壯悲の隊ルエ
敵小門二中の門三戰悲三門の中の門二は早くも破壊せられ壊滅せしてし

めに全く結婚を望んで居ないかも知れぬ。或女は既に結婚して居ても其結婚に種々の理由から滿足して居ないかも知れぬ。或女は一人の異性を愛するだけで其れ以外の要求を持つて居ないかも知れぬ。或女は一人の男性を愛し合ふこと以外の性交は自己の生活の中樞である愛情を汚す行爲とし、貞操を自己の愛情の象徴として嚴肅に擁護しやうとするかも知れぬ。――私自



及び獨陣地と六百乃至八百碼の近距離に在るを知るとる共に忽ち敵の猛撃を受け未だ砲火開く遠な
火の爲めに破ぶられ壊る一門なる以て最後の戰奮を爲しつゝある悲壯の光景）

身の貞操觀が現に其れである――また或女は多數の男子に性欲觀があつて貞操觀が無いやうに、貞操と云ふことを自己の生活の上に其れ程重大な問題であるとは考へず、極めて冷淡に取扱つて居るかも知れぬ。また或女は無情と酷薄とを極めた舊道德に對する反感から殊更に貞操を眼中に置かないと云ふ風な矯激の思想を持つて居るかも知れぬ

外から一律に萬

人へ覆つ被せる無理な倫理に愛想をつかして、個人が内から思ひ思ひに實際生活の要求に迫られて隨時隨處に建てる自然の倫理を推重する私は、貞操に就ても先づ何より個人の其時時の自由な併せて聰明な實行に任せることを望む者である。

私は特に「自由な併せて聰明な實行」と云ふ。眞の生活は實行より外に無い。そして實行は自由であると共に聰明でなくては失敗する　ここに「失敗する」と云ふのは社會上の成功不成功を云ふのでなくて、個人の生活意志の破滅することを言ふのである。内省した自我の上に不充實と不滿足との悔を招くに到ることを言ふのである。

既に貞操が婦人の生活の中樞生命であるとせられた時代は過ぎた。そして如何に質朴な民衆の上に神權主義の道德が壓力を持つて居た時代でも。實際に全婦人をその貞操倫理の金科玉條で司配することは出來なかつた。二夫に見えた女は地上到る處の帝王の家にもあつた。女の再婚は大抵已むを得ない事として現に寛假せられ、若しくは正當の事としてその父兄が强ひる程である。殊に貞操道德の制定者である男子が好んで多數の女子の貞操を破ることが普通の現象でさへある。今の男子の多數はさう云ふ不倫な祖先から生れ、若しくはさう云ふ不倫な女の父兄であり、配偶者であり、緣者であり、友である。如何に死を嫌つても世に死者を出さなかつた一族の無い如く、眞に人間を愛する人なら、最早貞操一點張りを以て女を責めるに忍びない筈である。

私はビカデリイやグラン・ブルヴアルの繁華な大通で、倫敦人や巴里人の車馬と群衆とが少しの喧囂も少しの衝突もせずに輕快な行進を續けて行くのを見て驚かずに居られなかつた。そして自由に歩む者は聰明な律を各自に案出して歩んで行くものであると云ふことを知つた。

私は貞操倫理のみならず、一般に從來の他律的倫理は現代の生活に害こそあれ用をなさないものであると思ふ。かう云へばとて私は女子の不貞不倫を肯定するのでは更々ない。私などは現に自分一個の貞操に就て保守主義者中の保守主義者であると評せられても笑つて甘諾する位に嚴肅な實行の日送りをして居る。私は自分の肉を二三にすることを非常に不純不潔なことだと思つて、さう云ふことを想像するさへ甚しい惡感と全身の戰慄とを覺える。私の生活は之を世の强者――天才の生活に比ぶれば勿論弱者の生活である。私は世の戰ひに自分の牙城を奪はれることがあつても、是非飽迄も死守しやうと思つて居る本城がある。そして私の貞操は其本城の一部であると思つて居る。併し其れは私個人の倫理である私自身のために建てた私の律である。私は自分の建てた自分のための倫理を尊重すると同時に、他の個人の建てた倫理を尊重したい。そして其れがお互に自由と聰明とを備へた實行の律でありたい。そのやうな實行の律を自ら建てて行く人こそ官學の教育を受けなくても、美衣を着けて居なくても尊敬すべき時代の優良階級である。

新しい生活の律は各自の實際生活の直感と、經驗と、反省と、研究と、精錬とから產み出される　貞操の如きも婦人が各自に聰明である以上、それが實際問題として自分に迫つて來た時、何とか自分から積極的にその問題との交渉を片附け得られる筈である。愛情や性欲の先驅と見るべき異性に對する好奇心すら自發して居ない少女に早くも貞操を注入するやうな教育が何の益にならう。私は教育者に向つては、貞操と云ふやうな實際生活の細目を一律に說くことの無駄な骨折を避けて、其代りに貞操ばかりでなく、どの實際問題に出會つても、惑はず、沮喪せず、妥協せずに、自分自身に最善を盡した生活律を建て得る「自由」と「聰明」の精神を養はせる教育に力めて欲しいと思ふ。また私は學者に向つては、婦人が貞操のやうな實際問題に出會つた時の參考資料として、實際生活に對する研究の過程と結論とを常に提供して欲しいと思ふ　そして私達婦人はまた自分の實際問題として研究の要求を生じた場合に初めて研究して差支のないことである。世の中のあらゆる問題は直接自分の實際生活に必要の切迫した時にのみ重大問題なのである。飢ゑて居る時は花より團子が我身に切實な重大問題であるのに、如何なる場合にも團子より花が大切だ、上品だと云ふやうな融通の利かない迷信があるのでどれだけ人生の健かな發達を阻害して居るかも知れない。

私は學者の議論が直ぐに人類全體の實際生活を改造することに役立つものであるやうな誤解を近頃までして居た。そして實際に役立つものでなくては最早現代の學問では無いやうに誤解して居た。併し學者は人生または自然の一方を常に凝視して未知の新事業を發見することに努力し、永遠の時を少しでも早く手繰り寄せて現代の生活に貢獻しやうとして居るものである。學者は永遠の中に住んで居る。現代に住んで現代を超越して居るのが學者の境地である。藝術家もまた同樣の境地に居る永遠の子である。學者や藝術家の事業には勿論その儘現代の幸禮となる種類のものも無いではないが、常に永遠の上に一方を凝視して得た思想である以上、其れが局限

エルス河畔南岸の一部落に於ける獨佛兵（邱弗利加兵）

せられた當面の時と、智識の度の千差萬別である現代の全人類とに皆が皆適用し難いのは當然である。私は學者や藝術家を尊敬する。併し學者や藝術家の思想から其現代に實行し得るものだけを選擇して自己の生活の改造に資するのは我々自身の自由であり、喜びであると思ふ。

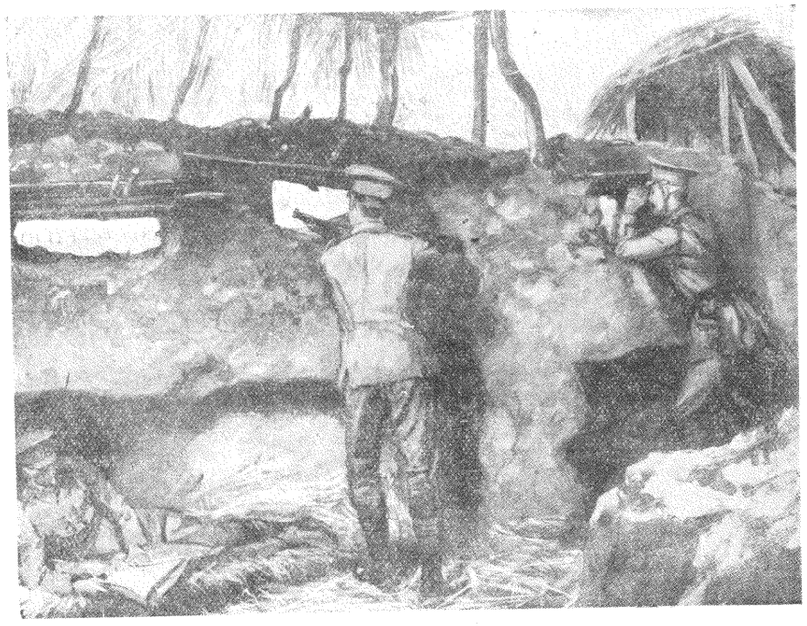
の接戰（獨軍は第一クルツ〃軍團の一部）

學者や藝術家は其純粹を保たうとする程、恐らく局限せられた實際社會の改造に指を染めてはなるまい。かの人達も一面には我々と同じ現代の一人である以上現代を最も多く眼中に置くことは勿論であるが、現代のために永遠を犧牲にしてはならない。現代の改造に熱中すれば恐

らく失敗するであらう。學者や藝術家が其純粹の自我を毀損しないで現代の紛々たる俗爭の間に立ち得るとはどうしても想はれない。私はオイツケンのやうな學者やハウプトマンのやうな藝術家が今度の戰爭に牽强の辯疏を獨逸のためになさねばならなかつたのを氣の毒に思つて居る。そしてまた私はベルグソンが其哲學を佛蘭西の政治問題や社會問題に適用しやうとする樣子のないと云ふことを聞いて大哲學者の聰明を奥ゆかしく想つて居る。

學者や藝術家と異つて、政治家、教育家、社會改良家、新聞雜誌記者などの生活は、天才の新思想に刺戟せられて常に驚異に全身を若返らせながら、自己の動もすれば一本調子に固定しやうとする生活を改造する資料として、その天才の新思想の中から或選擇を試みることを斷えず心掛けねばならぬ。それは我々普通人も同じことである。唯だ前者にあつては自己の生活を改造した上に、更に其れを公人として當面の政治問題、教育問題、社會問題の改造に適用しやうとする對他的實行が伴はねばならぬ。私は大隈侯の實際政治にも政友會の政治意識にも、ベルグソンやロダンの現代思想と更に一點の共鳴する所さへ認めることの出來ないのを口惜しく思ふ。そして我々現代の若い婦人が藝術を透した歐洲現代の新思想に感激しながら、一切の問題を個性の權威に卽して判斷しやうとする大勢を作り出したことに對して、猶空疎な舊日本の他律的倫理を以て威壓しやうとして居る教育家、社會改良家の大多數を氣の毒に思ふ。

英軍塹濠の内部（エイヤ河に於けるる）



華族評論

宮中奉仕の華族

（舊攝籙家）

西湖漁郎

榮華物語を讀みで、そが主人公たる御堂關白藤原道長が、光彩陸離たる生涯を想察せざるものはなかる可し。曾て渠が自家得意の心境を洩らしたりし、『この世をばわが世とぞおもふ望月の、かけたることもなしとおもへば』てふ和歌に徵するも、其の一端を窺知することを得可し。實に渠は王朝時代に於ける藤氏の權勢と榮華とを代表せるものと謂ふ可し。

斯く赫灼として並ぶものなき藤氏一門の勢威も、そが相互間に於ける權勢爭奪に腐心し、其の結果競ふて武人を惹いて自家の爪牙となし、其の援助に依賴するに至りたる以來、其處に勢力失墜の端を開きたるが、其の愈〻武家時代の出現し武將が一度天下に號令するに當りて、尙ほ朝廷の要職は依然として公家たる藤氏一門の掌裡に存し、其の世襲的地位は、動かす可からざるものありと雖も、而も其の實權は公家より離れて、殆んど武將によりて專斷せられ、而して武家は單に自家の政略上より打算して、進んで公家の進退に容喙し、且つ思ひの儘に左右せんとするまでに至りたるが如し、されば武家時代に於て、攝籙家の分立を生じ、所謂五攝家なるものゝ對立を觀るに至りぬ。

舊攝籙家の分立が、果して源氏、北條氏の政策に基因するものなるか。そは暫らく史家の見解に委ねて、玆には五攝家の由來に就て、極めて簡單に一言す可し。抑も五攝家とは現時の近衞、九條、一條、二條、鷹司の五公爵家を稱することは、玆に繰返へすにも及ばざる可し。而して近衞家が藤原鎌足の嫡流を繼承し、基實を祖とすることも、世人の熟知するところの如し。然るに基實の子基通の攝政時代に當りて、源頼朝平家を討滅して覇府を鎌倉に創搏したるが、當時頼朝の基通に含むところありしと、且つ攝籙家の權勢を殺がんと志せしところより、先づ鎌倉幕府に對し、常に好意を表し來りたる基實の弟兼實を擁立して、基通に代らしめんとし、强ひて後白河法皇に奏請し、遂に其の勅許を得て、兼實の攝政たるを觀るに至りたるが、爾後兼實は九條家の祖として、近衞家と對立し、以て近衞、九條の兩攝籙家分立の端を開く。降つて北條氏の執權時代となるや、近衞兼經の弟兼平攝政に任じ、近衞家より分れて新たに鷹司家を起し、亦九條道家